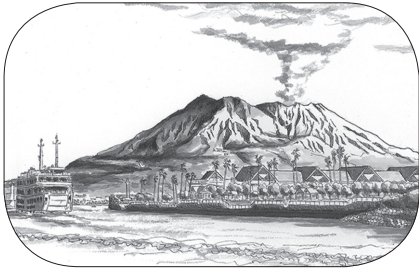


令和5年度

# 鹿児島県の教育

4・5月号



## 巻頭言



一般財団法人鹿児島県校長会館理事  
長 鹿島県立校長協会 会長

鶴丸高等学校長

前田光久

## 思考のメンテナンス

連合校長協会は、昨年度百五十二名が退職により退会し、今年度百五十名を新たに迎え、小学校長部会長に宮田研郎（名山小）校長、中学校部会長に中山恭平（清水中）校長が就任した。全国でも珍しい四校種校長会の連合体という特性を生かしながら、当面する様々な教育課題の解決に向け、今年度も会員の皆様の積極的な取組と相互の連携・協力をお願いしたい。

さて、今年度新たに就任された地頭所恵県教育長は、四月上旬に開催された県立学校長会の講話の中で、「大変革期にある教育界においては、流れを見据えた上で、県民の期待に応えるため、人・ものをマネジメントしつつ職員を導くことが大切である」とし、気概溢れる教職員の育成には校長のリーダーシップが不可欠であると述べられた。

予測困難な時代には、これまでの「常識」や「当たり前」は必ずしも通用しない。学校経営者たる校長自身の発想や判断においても同様であり、ベテランであればあるほど、経験値に頼らず全てをリセットした上で客観的な視座を持つことが求められる。

今、「アンラーン」という概念が注目されている。アンラーンとは「完成されたスキルや知識をあえて『不完全段階』に戻して、可

能性を広げること」「これまで身に付けてきた『思考のクセ』（パターン化した意志決定プロセス）を取り払い、柔軟な発想ができるようにしておくこと」（柳川範之・為末大共著「Unlearn～人生一〇〇年時代の新しい『学び』日経B.P.、二〇二二年）とされる。この概念は、例えば、会議の持ち方や資料の作り方、合意形成の過程等に関してそれまでの決まりのパターンを見直すことや慣例化した学校行事についてその意義や教育的効果を再検討する際に有効なものとなりうるであろう。

とは言え、既定路線の変更には相応の抵抗も予想され、たとえ無批判的にルーティン化した「学校カルチャー」であつてもそれを変えようとするにはそれなりの手間と決断に向かう勇気が必要となる。であればこそ、学校経営におけるアンラーンの実現には校長自らのリーダーシップの発揮が必須であると言える。

前例踏襲的な思考は大勢に影響せずその場は無難に過ぎるが、変革期にありながら思考停止に陥らないためにも、我々管理職が率先して一旦立ち止まり、学校運営に係る「思考のメンテナンス」に取り組んでみてはいかがだろうか。

令和5(2023)年 4・5月号

一般財団法人鹿児島県校長会館

〒890-0056 鹿児島市下荒田四丁目32-13

振替 02030-1-3192

TEL 257-9676 FAX 257-9679

(有) アート印刷

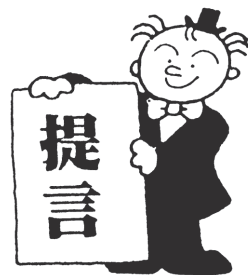
鹿児島市東坂元二丁目29-1

TEL 247-1605 FAX 247-2844

## \* おもな内容 \*

巻頭言	1	ある日の校長講話	12
提言	2	読書案内	14
退任にあたって	4	一般財団法人校長会館だより	16
新任の抱負	8	編集後記	16

表紙絵(桜島のデッサン) 4・5月号～9月号 菱田小学校 福森 真一  
題字(鹿児島の教育) 4・5月号～2・3月号 永野小学校 田邑八重子



## アフターコロナの学校経営は

### どうすべきか

荒田小(市) 鬼塚 仁

#### 一 はじめに

コロナ禍となつてから三年が過ぎた。各学校においては、感染防止対策を徹底しながら子供たちの学びを止めない努力を続けてきた。

ようやく終息が見えてきて、アフターコロナの状況になりつつある。三年間のコロナ禍が与えた影響には、学校にとってプラスとマイナスの両面があり、この経験を今後どう生かすかが重要である。校長として、アフターコロナの学校経営はどうすべきか、私なりの考えを述べる。

#### 二 新型コロナが与えた影響

##### (一) プラスになつた影響

新型コロナウイルスの影響により、最も進化したものはICTの活用だろう。もともとGIGAスクール構想によつて整備される予定であったが、コロナ禍における学びを保障するため前倒しで行われ、学校でも急速にその環境が整つた。研修会や会議等がオンラインに切り替えられ、学級閉鎖等で登校できない児童にはリモート授業も行うようになった。しかし、生徒指導や特別支援など対面指導でなければできない教育活動もある。今後は、アナログとデジタルの利点を生かしたハイブリッドな方法を探る必要

##### がある。

##### (二) マイナスになつた影響

マスクを着用する生活が三年間で定着してしまった。マスクは口元を隠し、目の下の表情が分かりづらいため、子供とのコミユニケーションも不足してきたと感じる。本年度から学校では、マスクの着用を求めないことが基本になつたが、外すことを少し嫌がる子供もいる。外したくない理由は、「感染が怖い。」ではなく、「素顔を見られたくない。」など心理的な問題もあるようだ。マスク着用が習慣化されてしまった今、「脱マスク」の習慣をつくるには、段階的に戻していくのが自然な形であり、もう少し時間を要する気がする。

##### 三 学校行事等の在り方

学校は、これまで学校行事等の規模縮小や時間短縮などの感染防止対策を行ってきた。アフターコロナを迎えた今、変更したものもそのまま継続するのか、それともコロナ前の姿に戻すのか、校長として判断に悩むところである。

例えば、その一つが運動会である。本校の運動会は、外部種目をカットして午前中だけの開催してきたところ、今後も午前中だけの開催を望む声が聞こえてきた。職員には運

動会の練習や当日の運営などの負担が軽減されたことや、保護者にはお弁当の準備や昼食場所等の確保をする必要がなくなったことがメリットに感じるのは当然のことだろう。

しかし、私は、地域の方々も競技に参加したり、家族や親戚みんなでお弁当を食べたりしていたコロナ前の姿に戻したいと考えている。子供たちが運動会を通して多くのことを学ぶ中で、特に大切だと思っていることが「人との関わり」である。コロナ禍によつて子供たちと地域の方々とのコミユニティの場が少なくなり、人間関係が一層希薄になつた今だからこそ、多くの人たちと関わり交流できる運動会にしたい。そうすることで子供たちの地域への思いや愛着が深まり、地域全体で子供たちを見守り育てる環境づくりに繋がっていくのではないだろうか。

#### 四 おわりに

業務改善の目的は、「学校における働き方改革を通じた教育の質の維持・向上」である。コロナ禍の経験を踏まえて学校行事等を見直し、思い切つて変えることも必要なことであるが、教育の質を下げずまで変える必要はないと思う。

学校経営者である校長は、学校行事等での豊かな体験や経験の場が、子供たちの心身の成長にとって必要不可欠であることを忘れてはならない。その活動の目的やねらい、期待される効果などを踏まえて、極めて慎重に判断すべきである。大変なことであっても面倒なことであっても、教育のプロとして、やるべきことはやらなくてはならない、と私は思う。



## 時代を生き抜く生徒たちのために

松元中(市) 木原 敏 行

『ランドセル選びドキュメンタリー篇』は、(株)セイバンが制作したウェブ動画で、その概要はこうだ。

小学校入学を控えた子どもたちに、店舗に置いてあるたくさん種類のランドセルから一つのランドセルを選んでもらい、保護者はその様子を別室でモニタリング。保護者は、我が子はそのれを選ぶだろうと思っていたというようなコメントをする。だが、そこに秘密があり、子どもが選んだランドセルは、子ども自身の好みのものを選んだのではなく、実は、保護者が子どもを選んでほしいと思うランドセルだったのだ。そして、次に子どもが本当に使いたい、好きなランドセルを選ぶと、それは先ほど選んだものとは異なるもの、というものだ。そして、「キミが好きなもの、キミが選ぼう」と結ぶ。

私たちは教師である。目の前の子どもたちに Society の時代に向かい、予測困難な時代をよりよく生き抜くための様々な力を身に付けさせたいと思うのは、おそらく共通の思いであると思う。そのために学校教育の場で、必要なことは何か、私は、校長という立場で考えてみた。私が今年度、職員にまず話したことは、「コミュニケーションをしっかりと取ろう」ということである。生徒とはもちろんのことであるが、保護者と、そして何より、職員同士のコミュニ

ケーションをと訴えた。年度初めは何かと忙しい。生徒たちも新たな仲間たちとともに希望を抱きつつも何かと不安を抱えてスタートを切る。保護者も同様。だからこそ、気になることは情報共有、情報交換、すなわち小さなことでも話題にし、互いにコミュニケーションを取り合い、よりよい関係づくりをしていこうと。

そして、生徒たちに語りかけながら、実は、職員に分かってほしい、実践してほしいと思いつながら伝えたことが、「チャレンジしよう」ということである。学校は失敗してもいい、間違ってもいい場所である。それを恐れて、何もしないのがよくないこと。みんなのために考えて、自分のためにもこうした方がいいと思うことは、恐れずにチャレンジしてみよう。このようなことは、多くの教師が子どもたちに常々話していることであるが、多様な個性をもつ教師自身にも、それぞれのよさを発揮すべく、逃げずにチャレンジしてほしいとの思いで話したことである。多少の苦労は当たり前、お互い様の精神で、前向きに取り組んでみようということである。自分中心の考えに陥り、守りに入ってしまったのはだめということ。

コロナ禍でのこの三年間で、私たちの生活様式が大きく変化したことと併せて、学校教育の様相も変化してきた。学習指導要領の実施や令

和の日本型学校教育の構築を目指した、先を見据えた教育の変革、また、業務改善への取組と世の中の情勢の変化に伴う人々の考え方の変化、さらに、保護者の意識も変わってきている。様々な変化への対応はせざるを得ないものだが、それを前向きに捉えられる者とそうでない者がいるのも事実である。しかし、歩みを止めるわけにはいかない。

本校の第七十七代生徒会のスローガンは、「New challenge New idea New make ~ Do our best ~」である。一部造語ではあるが、生徒一人一人の力で、松元中をよりよい学校、生徒集団にしていこうという熱い思いがこもっている。生徒の思いを真正面から受け止め、寄り添い、そして、教師は夢や希望を、時に理想を語り、生徒が好きなこと(中学校卒業後の進路、将来の目標)を、生徒自身が選べるように、そのために必要な学力を含めた生きる力を身に付けさせられるような学校、教師集団でなければならぬ。

さて、冒頭の動画であるが、子どもは親の喜ぶ姿を想像して思いを巡らせながら、確実に行動していることが分かる。また、親は、自分の好きなランドセルを背負い喜ぶ子どもの姿を見て、子どもが自分で選択することの大切さを感じ取っている様子が窺える。またご覧になったことがない方にはぜひ御視聴いただきたい。「ダイバーシティ(多様性)&インクルージョン(包括)」の時代と言われる今とこれからを生きる生徒のために、校長はアンテナを高く掲げて情報収集し、それを多面的・多角的に、その都度発信できることが大事な役割の一つなのだと思っ

ている。  
提言とは言い難い内容であることをお詫びして本稿を閉じたいと思う。



## 指揮者がいなくても



一般財団法人鹿児島県校長会館前理事  
前県連合校長協会小学校長部会部長

前大龍小学校長  
西園 香緒利

## 退任にあたって

令和五年度「鹿児島の教育」四・五月号に登場する最後の機会をいただいた。テーマは「退任にあたって」。この三年間、副部会長を二年、会長を一年仰せつかった。これまで役職に携わってこられた先輩方は、県内を始め、九州管内及び全国各地を飛び回り、本県の代表として多くの会議や研究大会に出席し、貢献されてきた。私はというと、コロナ禍真ただ中の三年間だったこともあり、先輩方のように十分に役割を果たすことができずに申し訳ない気持ちであるが、それでも、県連合校長協会の役員の方々が始め、各地区や市町村のまとめ役の方々が組織の一員として、同じ仲間として活動してくださったことが心強く感じられた。後任にバトンを渡した今、感謝の気持ちしかない。

昨年、NHKテレビで放映された「指揮者なしのオーケストラ 第九に挑む!」という番組を見た。鹿児島市で例年開催されている(最近

はコロナ禍で中止が続く)県民第九を鑑賞している私にとって、「えーっ、指揮者なし?それも第九?合唱も伴う大曲を?どういうこと?」と驚きを隠せず、番組に見入ってしまった。

このコンサートに挑んだ日本を代表するトッポ奏者七十四名は、日頃はコンサートの中軸を担い、国内外でも活躍している実力者ばかり。これまでの大舞台では、指揮者有りきの演奏会の一員として臨んできたはずである。全員が一流であればあるほど、指揮者なしで全体をいかに調整し、楽曲として仕上げるのか、想像もつかない道のりだったと思う。

楽団には各パート(楽器担当)があり、まずはそれぞれが音を重ね、紡いでいく。次に、音の調整(音量や響き等)を他パートと練り上げていく。この番組で、各自がプライドを持ち、しっかりと自分で考え、よりよいものにするために議論したり、自分の持ち場だけに徹せず、楽

曲の世界観を共有したりしながら、納得のいく作品に創り上げていくとする(共通の目的を持つ)奏者の姿を見ていたら、組織づくりの大事なヒントが散りばめられているように感じた。

意識も一流だからこそといえればそれまでだが、一人一人が指揮者(まとめ役)の視点で考え、自分のパート(役割)だけでなく、楽団全体へも目を向けることで、個々の存在がより輝き、全員で大きな成果をあげることが画面を通して伝わった。奇跡のアンサンブルが生み出した演奏会は「圧倒的名演」と評された。

一昨年、青少年赤十字指導者研修会に参加した折、講師の一人が、「リーダーは一人だけ、リーダーシップはみんながもっている。育てられる。」と言われた言葉がとても印象的だった。人材育成は、いつの時代でもどの分野でも必要不可欠である。リーダーになり得る人材だけを育てるのではなく、一人一人が考え、リーダーの意識を持つ集団(組織)づくりを目指していきたいものである。指揮者なしの楽団から届いた大きなメッセージは、今でも私の心に響いている。



退任にあたって

一般財団法人鹿児島県校長会館前理事  
前県連合校長協会中学校長部会副部長

前川内中央中学校長  
池田猛

つい先日三月三十一日に、永年勤めた学校勤務を定年退職した。定年退職の日に校長室に写真を自分の手で掲げ、十二時の時報と共に玄関の鍵をかけるという、私が教頭として初めて仕えた校長先生が見せてくださった言わば校長最後の儀式で、最後の締めをさせていただいた。当日は、深夜にもかかわらず、多くの教職員も見守ってくれ、感謝しかない。

退職を一年後に控えた昨年三月、退職された先輩校長に、「池田さん、最後の一年は気を付けやいよ。」と助言され、取り敢えず六十の厄払いをして臨んだ一年だった。厄払いの御利益もあまり感じられず、「なるほど、こういうことか。」と思わせる事態をいくつも経験させられた一年だった。それでも、日頃から、「チーム中央中」を掲げながら、皆で業務を進めてきたことで、大きな事態に発展せず、無事に終えられた。これも、全職員の協力、保護者の方々や地域の方々の御理解・御協力、そして、同じ立場の他校の校長先生方の助言、事務所や市教委の先生方の指導助言があったからこそであり、多くの関係の方々には、感謝しかない。

前と昨年度と二回経験させていただいた。四年前は、連合校長会の組織も分からず、ただ先輩方について行くだけの一年だった。この頃は、まだ様々な会合も開催されていたが、今思えば、私はただそこに居るだけの存在だったように思える。翌年の令和元年度末から、世の中はコロナ禍に突入し、様々な行事等が中止、短縮、制限された。そんな中、連合校長協会の役員をさせていただいていたこともあり、オンラインではあったが、全日本中学校長協会の総会に参加させてもらい、校長として、今後の学校教育について全国の校長先生方と意見交換できたことが、私にとって一番の思い出である。都道府県によって、また、地域によって経営方針や進め方、考え方も違い、柔軟な思考で、様々なアイデアを駆使しながら、学校経営を展開されている話を直に聞くことは、大変参考になった。本来であれば、その報告を県内の校長先生方に伝達するべきであったが、機会を逸してしまったことが残念である。

私は、鹿児島県の中学校教育に携わって、期限付き教諭を含め三十二年。ずっと大事にしてきたのが、「常に子供たちの傍で、子供たちと

共に」を信条として歩いてきた。管理職として、若い後輩たちにも、「常に子供たちの傍で、子供たちと共に。」と話してきた。目で見る。耳で看る。心で観る。子供たちは、教師に見守られていることで、緊張はするが、安心もする。それが、教師と生徒の信頼関係を構築し、そのことが学級経営に生かされ、教科経営にプラスになると信じて進めてきた。平成の初期から中期にかけては、課題は「生徒指導だ」と答える中学校が多かった。保健体育科の先輩教師に「体育科教員が生徒になめられたら、学校は崩壊する。」と言われたのもちょうどその頃である。でも、そんな学校の課題を乗り切ってこられたのも、子供たちに寄り添い、子供たちの話を聞き、一緒になって悩み、考えてきたことが大きかったと思う。

情報化が進み、社会全体が大きく変化してきた現代ではあるが、子供たちの本質は変わらない。心身とも大きく成長するこの中学校期だからこそ、「子供たちに寄り添う」ことが大切だと思う。令和四年十二月に生徒指導提要在改訂された。「子供たちに寄り添う」ことこそが、この基本ではないかと思う。そして、成長の著しい中学生を支える「保護者にも寄り添い」、一緒になって見守っていくことで、子供たちの「心身共に健全な育成」につながると信じる。

結びに、今回このような機会をくださったことに感謝申し上げますとともに、鹿児島県連合校長協会のますますの発展を祈念申し上げます。

## 「卒業」すること



一般財団法人鹿児島県校長会館前理事  
前県連合校長協会高等学校長部会副部長

前甲南高等学校校長  
池田浩一

## 退任にあたって

これまで、有り難いことに、「鹿児島の教育」に三回ほど文章を載せていただいた。最初が、ちょうど八年前の今月号で「攻める『伝統』の実践」として新任校長の抱負を記したのだが、今読み返してみると、自分なりに情理の両面を意識しつつも、肩肘張って書いているなあと思わされる。お前が言うか、と言われそうだが、組織の中で、多くの人の話を傾けると、自分自身が変わろうとするこの意義、大切さを痛感させられる。その意味では、だいぶ時間をおいてから書かせていただいた残り二つは、まだ少しは読み易くなったかとやや慰められる。よって、退任寄稿文も同様、読み易さに主眼を置く、主観だらけの駄文を、御容赦いただきました。

学校生活の中でも感動が最大公約的に発露されるのは卒業式だと思うが、今年の卒業式も感動的だった。やはり答辞。生徒会長は自分たちの高校生活を次のように語った。「私はこの三年間で、当たり前のように思っていた日々が、どれだけ幸せで貴重なことだったのかを身に染みて感じました。昼休みに机をくっつけて向かい合いながらお弁当を食べることは一度もなく、思っていたとおりの青春ではありません

でした。この状況に何度やりきれない思いを感じ、涙を堪えたことでしよう。しかし、そんなときに救ってくれたのは、マスクで遮られても消えることのない最高の仲間たちの笑顔でした。みんながいたからこそ頑張れたことが沢山あります。『ここに来てよかった』みんなのおかげでそう思えます。これからは、別の道に進み毎日顔を合わせることもなくなります。困難に直面したときは、ここで学んだこと、ここで巡り合えた先生方や仲間たちのことを思い出し、顔を上げて『夢』や『目標』を見据え、新たな未来を切り開いていきましょう。」

コロナ禍で苦渋の選択を繰り返しながら生徒たちには、「どんな状態を普通と捉えるか。」「大きく飛躍するためには縮みも必要」などと前向きに述べてきた。建前と本音のギャップは当然あるが、生徒たちもきちんと捉え、挑み続けてくれたことに感謝する。当然それを支えた教職員や保護者に対してもである。

と、ここで、校長職を卒業する自分が、答辞を述べるとしたら何を述べるのかを考えた。先に引用した生徒会長の答辞は、状況やその対象期間は異なれど、ほぼ重複するのはと気づいた。子どもたちに教えるのが好きで、多くの可

能性に会えると思つて選んだ道だが、直接的でない立場で、直接言える先生方を羨ましいとも思いつつ、学校経営の視点から発言し、行動してきた。様々な環境の職場で、厳しい状況であっても、やはり救ってもらったのは、多くの仲間たちだった。この立場で良かった、と単純には言えないが、多くの出会いには、本当に感謝するし、立場での醍醐味もあったのだらうと思う。自分の場合、行政の期間も結構あり、その際、立场上言っていた言葉の一つが恥ずかしくも思い出される。「皆さんの辞令には裏書きがある」という言葉。生徒にも紹介した森信三氏の表現に「人は生まれ落ちた瞬間に全員が天から封書をもらつて来ている。その封書を開けたら、あなたはこういう生き方をしなさいと書いてあるそうだ。しかし、残念なことに、多くの人々がせっかくなからもらった、それぞれの封書に気づかず、一回も開けないまま人生を過ごしている」がある。自分がもらった辞令にあった裏書きをきちんと読み解き、務めたのか、そのことは、自分の使命に応えたものだったのだろうか、考えるほど深みにはまりそうだが、現在忙殺されている年度末業務をきちんと片付けたら、じっくり考えてみたいものだ。

「卒業式だというけれど何を卒業するのだろうか」と歌われるが、区切りではあり、道は異なるけど次の取組に向け、スタートすることは同じだと思ふ。これまで関係した全ての皆様に御礼申し上げ、全校種から構成される連合校長会の発展、各校長先生方の御多幸をお祈りする。





誰もが生き生きと活躍できる

共生社会に向けて

一般財団法人鹿児島県校長会館前理事  
前県連合校長協会特別支援学校長部会副部長

前鹿児島高等特別支援学校校長  
上 國 料 里 美

教職にあつた三十六年の間に、特別支援教育の位置付け、在り方は大きく変わった。特別支援学校だけでなく小・中・高等学校の多くの学校で学校経営の柱の一つとして捉えられ、様々な取組が進められるようになった。

こうした改革の背景の一つには、平成一九年の障害の程度等に応じて特別の場で教育を行う「特殊教育」から子供一人一人の教育的ニーズに応じた適切な指導及び必要な支援を行う「特別支援教育」への発展的な転換がある。それから一六年目を迎える。

特別支援教育の重要性や必要性については、福祉分野における発達障害者支援法の浸透もあり、多くの教師や保護者、関係機関に認識されるようになり、以前は、特別支援学級への入級や特別支援学校への就学に対して不安や戸惑いを示される保護者等の相談を受けることが多かったが、少しでも早く支援を受けたいと望まれる声も多く聞かれるようになった。

そうした特別支援教育に関する保護者や教師、関係機関等の理解や認識の高まりとともに、特別支援学校だけでなく小・中・高等学校においても、特別支援教育を必要とする児童生徒が増加し続けている。一人一人の教育的ニーズに  
応えるべく本県においても、特別支援学級に在籍する児童生徒が増加し続けている。

令和三年度文部科学省は、特別支援学級及び通級による指導の実態調査を行った。その結果一部の自治体において、次のような事例があつたという。

特別支援学級において特別の教育課程を編成しているにもかかわらず、自立活動の時間が設けられていない。

個々の児童生徒の状況を踏まえずに、特別支援学級では自立活動に加えて算数(数学)や国語の指導のみ行い、それ以外は通常の学級で学ぶといった、機械的かつ画一的な教育課程の編成がなされている。などこのような事例は、本県においても散見される状況にあると聞く。

特別支援学級の意義は、児童生徒の障害による学習上または生活上の困難を克服し自立を図るための自立活動の実施と、各教科の目標や内容を下学年のものに替えたり、各教科を知的障害者である特別支援学校の各教科に替えたりするなどして、実態に応じた特別な教育課程を編成できることである。その意義に基づく特別の教育課程が適切に運用されなければ、効果的な指導の成果は得られない。あるいは、そうした教育課程編成の必要がないと考えられる児童生徒については、その学びの場の検討・判断が適切に行われていたのかと危惧される。

学びの場の検討については、多くの学校で校内委員会又は校内教育支援委員会等で行われるが、その校内委員会等の在り方について、令和五年三月、文部科学省に設置された「通常の学級に在籍する障害のある児童生徒への支援の在り方に関する検討会議」の報告の中で、以下のよう  
な提言がなされている。

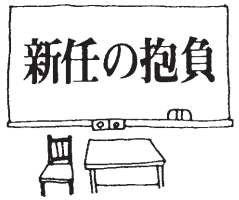
「校内委員会において支援策等を検討する際

には、児童生徒の教育的ニーズを踏まえ、どのような支援を必要としているのかを把握し対応策を検討することが重要である。具体的には、まずは通常の学級において、学級全体に対してわかりやすい授業の工夫を行うことが重要である。その上で、ICTを含む合理的配慮の提供、特別支援教育支援員の配置などにより十分に学べるのかを検討する。さらには、特別支援学校のセンタ－的機能の活用や外部の専門家と連携しながら支援の必要があるかを検討するなど、通常の学級の中でできる方策を十分に検討した上で、自立活動など特別の教育課程が編成できる通級による指導や特別支援学級の必要性を検討していくという段階的な検討のプロセスが大切である。」

このような段階的な検討のプロセスを経ずに、学習についていけない場が、問題行動が目立つからなどの理由で学びの場が検討されていることがないだろうか。校長先生方のリーダーシップの下、当該児童生徒の細かな実態把握や指導の経過などを関係職員と共有し、学級経営や授業づくりの工夫に努めながら校内委員会等で検討が進められるようお願いしたい。

令和三年一月の中央教育審議会答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」では、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を目指すこと、また「指導の個別化」と「学習の個性化」を図ることが示された。それは、これまで特別支援教育が目指してきた児童生徒一人一人に応じた指導内容、指導方法の充実を図り、自立や社会参加に向けた主体的な取組を支援するという方向性と同じである。

障害の有無にかかわらず誰もが生き生きと活躍できる共生社会の実現に向けて、小・中・高等学校、特別支援学校が一つになって取組を進めたい。全ての校種の校長で組織される本県連合校長会ならではの強みが一層発揮されることを願っている。



## よりよい柏原小学校を目指して

柏原小(北) 石川 雅 仁

久しぶりに戻ってきた学校という場所は、何もかもが輝きを放っている。校長という職を命ぜられ、不安ばかりが先行して重い気持ちでいたが、柏原小学校の子供たちと出会い、一気に吹き飛んだ。「ここで子供たちのために全力を尽くそう。」自然とそう決心することができた。

四月十四日現在、校長という職は実に楽しいと感じる。今感じている楽しいことを並べてみる。

### ○「子供と会える！」ことが楽しい

「校長先生、おはようございます!」「校長先生、これすごいでしょう!」子供たちが次から次に話しかけてくる。子供の明るく元気な声に、改めて「学校っていいなあ。」と感じさせられる。

学校を離れ、行政での仕事が数年続き、大人を相手にする業務が多かったせいなのか、特に感じる。これまでも鹿児島県の子供たちのために仕事をしてきたつもりではあるが、子供たちの反応を実感する機会は少なかったと振り返る。自分が伝えたこと、策として打った

ことに対して直接反応を見ることができるのは、まさに学校である。自分がなぜ教師になろうと思ったのか、教職を目指した原点を今更ながら強く確認した。

### ○「こんな学校にしたい!」と工夫できる(できそうな)ことが楽しい

指導主事や研究主事という立場上、私はこれまで様々な学校を訪問する多くの機会があった。そのとき感じたのは、それぞれの学校には個性があり、それぞれの校長の学校経営が多分に反映されているということである。同じ学校であっても校長が代わることで、学校の雰囲気や文化が大きく変化していった学校を何校も見てきた。学校現場を離れば離れるほど、「こんな学校にしたい!」「こんな子供たちを育てたい!」「こんな職場にしたい!」という思いが大きく募っていた。今こそ、それらの思いを放出し、全力で動き出すときのだと強く思う。

そして、今日までわずか数日間であるが、校

長という仕事をしながら感じるのは、私に「校長をさせてもらっている」ということである。つまり、校長一人が学校をつくるのではなく、職員全員がチームとなって学校を運営しているという感覚である。本校職員は全員、柏原小学校の子供たちのために毎日全力で教育活動に当たっており、それぞれの役割を精一杯遂行している。しかし、その思いはややもすれば、バラバラかもしれない。先生方の思いが揃っていなければ、効果は半減してしまうだろう。つまり、先生方の思いのベクトルを一つに揃え、たし算のみならずかけ算をして、教育効果を増大させることが校長の最大の使命なのだと強く思う。

そこで、年度当初の第一回目の職員会議において、校長から学校経営について伝える時間を急遽、全職員によるワークショップに変更した。三つのグループに分かれ、「柏原小学校の理想の子供の姿(目指す子供の姿)」について全職員で語った。楽しく、和気藹々とした雰囲気づくりの中、昨年担任をした子供の姿から考えたり、自分の教育観に基づいて考えたりした。もちろん、事務職員や学校用務員もそれぞれの立場から大いに語ってもらった。職員みんなで語った「柏原小学校の理想の子供の姿」を、この原稿を仕上げた後整理し、令和五年度の学校教育目標を立てるつもりだ。

全校児童八十三名、教職員十七名、計百名で力を合わせ、もっともっとすばらしい柏原小学校をつくっていききたい。



## 新任の抱負



### 「生徒が主役！」となる

### 栗野中学校を目指して

栗野中(始伊) 南郷 美幸

#### はじめに

「ようこそ栗野中へ」

人事異動の発表後、一枚のファックスが届いた。それは栗野中学校生徒会役員の笑顔の写真と学校の特色が書かれた歓迎メッセージだった。「私たちは一人一人輝く生徒会を目指しています。先生と一緒にがんばっていきたいと思います。」と温かいメッセージが書かれていた。それまで心に抱いていた不安や緊張が和らぎ、生徒や地域のために栗野中で頑張ろうと熱くなる思いで決意と覚悟を新たにした。

#### 二 栗野中について

本校は、雄大な霧島山系の西麓、湧水町の南に位置し風光明媚な地にある。昭和四十二年、栗野中学校、栗野西中学校、幸田中学校が統合し、五十七年目を迎える伝統校である。校区内四つの小学校から本校へ入学している。校訓は「自主・創造・友愛」、学校教育目標は「ふるさとを愛し、豊かな心をもち、考動できる生徒を育てる」である。町内には年間を通して様々な伝統行事が継承されており、地域に根ざした教育活動が展開されている。生徒が地域と関わり、地域に貢献し、ま

た地域から鍛えてもらおう取組がなされている。また「考動」という言葉にあるように「自ら考え自ら動く」という姿が自然とできていく。今後も生徒を主役に教育活動を展開していく学校経営を目指している。

#### 三 大切にしたいこと

義務教育九年を終える修了段階では、これからの変化の激しい社会を生き抜くために、「未来を描く力」を育成することを通して、学校教育目標を達成することを目指していきたい。そのために次の二つを重点とする。

(一) 確かな学力の定着

「生徒主体の授業」とは、どのような授業なのか、全職員と共有し、学力向上プランを見直し、栗野中スタイルを確立し、全職員が同じベクトルを進めていく。

#### (二) 自己有用感の高揚

生徒主体の活動の場を多くもたせ、「生徒が主役！」生徒が様々な場面で活躍し、輝けていくような実践を重ねていく決意である。

#### 四 毎日が新しい発見、毎日が新しい感動

先日生徒会入会式、部活動紹介があった。生徒によるプレゼンテーションを使った

紹介、絆づくり、仲間づくりを目的とした異年齢集団での活動、各部活動の特徴を生かしたパフォーマンス。すべて生徒の力で行われた。生徒の力のすばらしさを感じた日だった。

本校は、職員と生徒が玄関を共有している。

朝のあいさつ運動から帰って生徒の靴箱を見ることが毎日の楽しみの一つである。登校してきた生徒の靴のかかどがきれいにそろっており、一日のスタートにふさわしい朝の光景である。

#### 五 最後に

栗野中の校門階段の最上段に「二瞬同心」と「瞬礼」という言葉が書かれている。生徒は登下校の際に、ここで立ち止まって、登校の際は「今日もがんばるぞ」、下校の際は、「ありがとうございました。明日もがんばります」という気持ちを表す「瞬礼」を行っている。校長室には、歴代の校長先生方の写真が掲げられている。今まで築き上げられた歴史と伝統がずっしりと伝わってくる。私も写真に向かって「今日も温かく見守ってください」と瞬礼から始まり、瞬礼で一日が終わる。

新任校長として毎日の職務に追われる日々であるが、生徒の頑張り、職員の団結力、保護者や地域の温かい言葉で元気をもらっている。これから様々な困難も出てくると思うが、生徒、職員、保護者、地域と連携を図り、「生徒が主役」となる学校になるよう教育活動に邁進していく所存である。



## 「新任の抱負」

徳之島高等学校 上田 勇一

暦のめぐり合わせで、新年度の仕事始めとしては最も遅い四月三日となった県庁での辞令交付式。

御自身も就任されたばかりの地頭所恵教育長から新任校長一人一人に辞令をいただいた。

同席した新任校長は、多くが教頭会等で面識のある顔ぶれ。緊張の中にも、少し安堵感があった。

「鹿児島県公立学校長に任命する 鹿児島県立徳之島高等学校長に補する」

数年前に教頭職を拝命した時も同じだったが、今回はその時以上に、「なぜ自分が？」というのが率直な思いであった。

その足で鹿児島空港へ。

鹿児島空港から徳之島に向かう午後出発の航空便は一本だけ。翌四日に早速、年度初めの第一次職員会議が予定されていたため、何が何でもその便に乗らねばならなかった。

空港には、思いがけず旧任校の職員が見送りに来てくれており、最後の別れを惜しむことが

できた。

飛行機は定刻出発。およそ一時間ほどで、無事、徳之島子宝空港に到着。職員二人が出迎えてくれ、夕方、任地である徳之島高校の門をくぐる。

同じ県内とは言え、鹿児島市から数百キロ南の徳之島の風は少し暖かいが、その風の暖かさ、気候、夕暮れの空の色、その空に浮かぶ雲、自然、サトウキビ畑、そして徳之島高校のたたずまい、まだ二十代の頃に奄美大島の高校に勤務したこともあり、徳之島に来るのも数回目。久しぶりの「奄美」に懐かしさすら感じた。

そして、徳之島高校の門の前に立ち、改めて、「なぜ自分が？」と自ら問うてみる。その問いを自らに投げかける度に出てくる答えがある。

かつて、ある方から聞かされた言葉である。「あなたが、その立場に立つことになったのは、あなたの力・努力もあったかもしれないが、それ以上に、あなたにそういう立場に立つて欲しいと願ってくれた人たちがいたからだ。しか

も一人や二人ではなく、それなりの人数、考えている以上に多くの人たちがそう思ってくれた結果だ。でなければ、あなたがその立場に立つことはない。だから、自分の望みや思いに関係なく、その人たちの期待や思いに応えられるよう頑張りなさい。」

この言葉を初めて聴いたのは何年前だっただろう。その日以来、この言葉は何度も何度も私を励まし、勇気づけてくれている。

そして、新規採用となったばかりの先生たちやいろいろ思い悩んでいる先生たちを励ます時、失礼ながらこの言葉を度々無断で拝借している。

私自身は、恥ずかしながら、この言葉を実践できているとはとても言えない。私に期待してくださる人たちへの恩返しは、今のところまだまだで、「借り」ばかりが増えていく一方である。

これから、生徒たちのため、保護者のため、職員のため、学校のため、地域のため、一日一日、少しずつ少しずつ、恩返しに励みたい。

今回の異動が発表された直後、保護者から電話でお祝いの言葉をいただいた。その保護者はお仕事の関係で徳之島を訪れたことがあり、その時の印象を、「徳之島は宝の島です。」と話されていた。純朴で、素直で、そして少し不器用で…そんな「宝」がまばゆいほどに輝くよう、精一杯尽くす所存である。

## 新任の抱負



# 「いきいき」「のびのび」を

加治木特別支援学校 奥村 さゆり

### 一 はじめに

この四月、鹿児島県立の特別支援学校は、「養護学校」から「特別支援学校」へと名称を変更した。学校で行われる教育内容は変わることはないが、特別支援教育の教育理念が鹿児島でもようやく浸透し、新たなスタートを切ったこの機に校長に任命されたことは、自身の気持ちをより引き締めることとなった。同じ特別支援学校でも対象とする障害種が異なると学校の様相も大きく異なる。そして、教頭として見る学校と校長として見る学校では、見える景色も大きく違うことを実感している。

### 二 桜丘での日々

三月まで教頭として勤務していた桜丘養護学校は、児童生徒数の増加による施設の狭隘化の解消と高等部の新設のため、鹿児島市西谷山に鹿児島南特別支援学校として生まれ変わった。桜丘での二年間は、移転業務とコロナ対応、そして増えすぎた児童生徒と職員、保護者対応に明け暮れた日々であった。

「移転」と「コロナ」、これまで経験したこ

とのないことに対して個人の力では解決できないことばかりであったが、ひとつひとつの案件に対してみんなで知恵を出し合い、課題に対してチームで取り組むことを学んだ。

そんな困難を共にした先生方や保護者の方々、そして子供たちとの別れは、学校の引っ越しという大事に紛れ、慌ただしいものであった。

### 三 加治木の子供たちと共に

加治木特別支援学校に赴任し、一週間が過ぎた。職員会議での学校経営方針の説明、始業式での「校長先生のおはなし」入学式での「式辞」、いきなりの校長業務に戸惑いながらも、桜丘でのにぎやかな喧噪の日々とは裏腹に、ここには、穏やかで静かな日常がある。病弱と肢体不自由を対象としており、障害の程度が重度の子供の占める割合が大きいため、より個に応じた対応が求められる、職員の専門性も求められる。重度の子供の中には反応や表出も乏しく、成長や発達もゆっくりな子供もいる。南九州病院に入院している子供たちが通学したり訪問教育を受けたりしてお

り、その中には、日々、命と向き合っている子供もおり、健康が当たり前ではないことを思い知らされる。

そんな子供たちに対して先生方の支援やアプローチは共感的で、気持ちに寄り添い、時には気持ちを代弁し、小さな反応や変化を見逃さず、反応に対して皆で喜びあう様子は、子供たちに対する愛情であふれている。

子供たちや先生方の様子を見て、自分の校長としての使命は、この日常を守ることなのだと思えて心に刻んだ。

### 四 おわりに

桜丘から加治木、教頭から校長、大きな環境の変化に気持ちが追いつかず、慌ただしく去った桜丘でやり残したことなどを思い、まだまだ校長としての自覚がもてているとは言い難い。

加治木の学級は「のびのび学級」「いきいき学級」という名称が使われている。加治木の子供たちがこうあってほしいということを表して、素敵なネーミングだと思ひ、入学式の式辞でも引用した。

これからの学校経営において、加治木特別支援学校の校長として、子供たちが健やかに「いきいき」「のびのび」と日々を過ごし、一人一人が自分のペースで学び、先生方、保護者の方々が笑顔でいられるよう尽力し、そして、自分自身も、これまでの経験を生かし、自分らしく「いきいき」「のびのび」と、そして「上機嫌」に校長職を務めていきたい。



## ある日の校長講話



それをやってみることもの方が大事だ

加世田小(南) 喜 島 宏 明

皆さんおはようございます。昨日は、六年生の卒業式が行われました。百六人の卒業生、一人も欠席することなく全員が参加して、すばらしい卒業式になりました。最後に別れの言葉や加世田小学校の校歌を歌いましたが、六年間の思いが伝わってきて、とても感動的でした。

さあ、今日は修了式です。この後、皆さんには、修了証書が担任の先生から渡されます。一人一人の様子を、先生方がしっかりと見て、成長した様子が修了証書にまとめられています。一年間の皆さんの頑張りや成長した様子が、よく分

かりうれしくなりました。皆さんも自分を振り返って、頑張ったところはもっと伸ばし、まだまだだというところは、春休みに取り組んで、新しい学年の準備をしてください。

さて、四月に、新しい学年に進級する皆さんに伝えたいことがあります。WBC(ワールド・ベースボール・クラシック)は、日本チーム(待ジャパン)の劇的な勝利で、世界一となりました。皆さんも準決勝、決勝とチーム一丸となって頑張る姿に力と感動をもらったと思います。

その中に、打者と投手の二刀流でチームを引っ張ったメジャーリーガー大谷翔平選手がいます。大谷選手は、あるインタビューで、「成功するとか失敗するとか僕には関係ない。それをやってみることもの方が大事だ。」と話していました。

そこには、「やってみよう」と一歩を踏み出す勇氣、そして、挑戦する気持ちをもち続けている大谷選手の姿がありました。「打者と投手の二刀流は無理だ。」と多くの人が言う中で、自分を信じてやり通した思いが、今の大谷選手の活躍につながっています。

皆さんも、様々な夢を描いていることでしょう。一歩を踏み出す勇氣と挑戦する気持ちもち続けて、夢に向かって努力を積み重ねる人になってください。

来年度もレッツ・チャレンジ!  
自信と勇氣をもて!

池田小(隅) 石 踊 晴 元

今日で三学期が終わります。この一年間、皆さんは勉強や運動、学校行事等に一所懸命取り組んできました。そして、皆さんは学習したことを身に付け、どんどん成長してきたと思います。皆さんにはできるようなったこと、頑張ったことが多くあり、校長先生は大変嬉しく思っています。

そこで、この一年間、頑張ってきた皆さんにメッセージを贈ります。それは、「来年度もレッツ・チャレンジ!諦めないで何事にも最後までチャレンジしてほしい」ということです。二人の選手を例に挙げて話を進めます。

一人目は、W杯日本代表のサッカー選手三笥選手です。三笥選手は、スペイン戦でゴールイン一ミリに残ったボールを必死に追いかけ、クロスパスを出しました。このパスを田中選手がゴールを決め、この一点で待ブルーは決勝トーナメントに進出することができました。

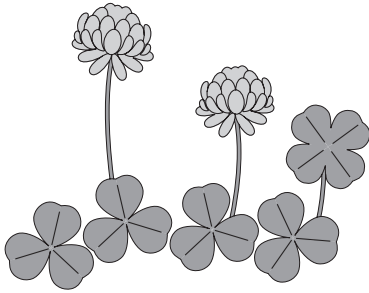
二人目は、WBC日本代表の野球選手ヌートバー選手です。守備では、センター前ヒットになりそうな打球をスライディングキャッチして

ファインプレーをしたり、打撃では、ボテボテの内野ゴロを打っても全力疾走をして出塁したりして、常に全力プレーの姿を見せていました。

この二人の共通点は、最後まで諦めずにプレーをしているところです。三管選手がボールを追うことを諦めていたら、ヌートバー選手が全力プレーをしていなかったら、試合の流れは大きく変わっていたかもしれません。

諦めずにチャレンジした分、成功や喜びが大きくなると思います。これが、池田小学校の校訓「自信と勇気をもて」につながると思います。常に前を向き、諦めることなくチャレンジしてほしいと思います。

四月から一学年ずつ進級します。勉強も難しくなりますが、自信と勇気をもって、これまで積み上げてきたことを糧にして、立派な池田の子に成長してください。



## 「避難する」という勇気のいる決断

金久中(大) 窪 田 智 司

人間は経験をすることによって、行動の仕方学びます。今日の避難訓練は「地震による津波発生」を想定した避難訓練でした。予知の技術が進歩したとは言え、「いつ」「どこで」「どの程度」の天災に遭遇するかまだまだ分かりません。避難訓練は疑似体験ではありませんが、いざというときに、自分の命や友人の命を守るために、適切な行動をとることができるように考えたり、行動したりする時間です。決してやれはいいのではなく、その効果が期待できないという意味がありません。

さて、災害から命を守る一番簡単で一番シンプルな対策は、何かあったら避難するということです。東日本大震災でも、避難した人は助かったケースが多く、避難しなかった人は亡くなってしまった方が多いのは事実です。

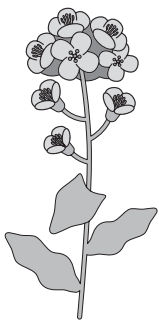
皆さんは「釜石の奇跡」という話は知っていますか。ここには、避難三原則という教えがあります。「原則一…想定にとらわれるな」「原則二…その状況下で最善を尽くせ」「原則三…率先避難者たれ」

ハザードマップに示されている想定にとらわ

れず、ここまでくればもう大丈夫と考えるのではなく、その時でできる最善を尽くしたからこそ、避難することができたのです。また、人はいざという時になかなか「逃げる」という決断ができません。自分の所は大丈夫だろうと自分に都合の良い解釈をして、その場に留まってしまふことが多いのです。釜石では、中学生が率先避難者として避難を開始したことで、周囲の住民も避難を行い、大人たちの命も救ったのです。

「避難」ということは、とてもシンプルで簡単な対策ですが、とても勇気のいる決断です。けれども、その決断によって自分の命も周りの命も救うことがあります。自然災害は人間の力ではどうしようもありません。自然災害からは逃げるしかありません。

近年頻発する豪雨や、猛暑、台風などの異常気象も含め、「天災は忘れた頃にやってくる」のでなく、今や「いつでもやって来る」ことを自覚しないわけにはいきません。もう一度、いざという時の準備、「心の準備」「物の準備」、家族との「連絡の準備」などを確認し、災害に備えてください。



## 読書案内



■田口佳史 著

### 超訳 言志四録 佐藤一斎の

#### 「自分に火をつける」言葉

高千穂小(始伊) 森 幸 恵

昨年、校長となり、学校経営に携わる中で、理念を語り、実行につなげる難しき、物事を「変える」際の行程の工夫、人を育てる視点を日々学んでいるが、自分の器と度量が伴わず、リーダーとはいかにあるべきかを悩む毎日であった。

「言志四録」とは、江戸時代の儒学者である佐藤一斎により記録された「本気で生きる」た

めの指南書である。一斎の数千人に上る直弟子には、佐久間象山がおり、その門下には勝海舟や坂本龍馬、吉田松陰、さらに、吉田松陰の門下からは、高杉晋作や木戸孝允、伊藤博文などが輩出されている。弟子筋ではないけれど、西郷隆盛も流罪先の沖永良部島で「言志四録」を一心に読み、学んだことで知られている。しかしながら、この「言志四録」、読破することは容易ではない。なぜなら、一斎が約四十年に及ぶ歳月を賭して著された大作であり、漢文で全四冊に記されたその教えは、千百三十三条に上るからだ。本書では、その中から九十条を厳選し、著者が一斎の示す人としての生き方、リーダーとしての在り方を易しく解説してくれている。

学に志すの士は、当に自らの己を頼むべし。人の熱に因ること勿れ。

本書のタイトルの一節「自分に火をつける」言葉として心に響くものがある。自分の学びを人頼みにするのはなく、「火が欲しいならば、自分で火打石を打て」と何をするにも他力ではなく、自力でやる覚悟を持ってと説いている。「自分に火をつける」ことで、「変わる」火種となり、他者へもその道筋を示す。校長としての胆力と覚悟を促された一冊である。

三笠書房 六六〇円

■鹿島しのぶ 著

#### 「品がいい」と言われる人

名瀬小(大) 上村 英 樹

本校に着任した際、職員に、「名瀬小職員としてのプライドを持って教育にあたつて欲しい」と伝えた。このことに関係して「薫育」について説明した。薫育については、過去に勤務していた学校でその意味を学んだ。薫育とは「徳」を持つて人を教え導くこと。徳とはその身に備わった品性等。品性、品格を備えた教師集団であつてほしい。そのような教師集団の中で、子どもを育てて欲しいと伝えた。程なくして、教頭から一冊の本をいただいた。それが本書である。

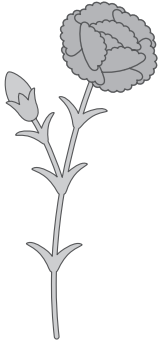
本書は全四章からなっている。品がいい人の「言葉遣い、態度」「所作、外見」「習慣、性格」「心構え、生き方」である。この書を読みすすめるうちに、私が接してきた方々で、どこことなく品があると感じた方と重なる視点が、随所に書かれていた。すぐに意識して取り組めるものが多く、自己を振り返るには大変よい書である。例えば、冒頭の章で「人は恥を知るほど、品の



ある人になれる」とある。「自分には何か足りないのではないか」「自分のことが劣っている」という意識を持っているからこそ努力もできるし、自分以外の人の事も敬えるし、氣遣える。「そういう姿勢を持っている人こそ品格のある人ではないか」と、述べている。ちよつと物事を知っているからとひけらかす人は、どこことなくつつきにくく、品がいいとはみられない。

また、第三章の「いつもおおらかな人、ほがらかな人の魅力」では、「人間性が最も表れるのが笑顔だ」と、述べている。人々は人間性あふれる笑顔に魅了される。「たとえ失意の中にあつても、自分を取り囲む人を大切に、一緒に手を携えて生きていこうと思える人こそ、本物の品格を備えた人だ」とも述べている。日々の学校生活の中で、まだまだ笑顔を見せられない、品のない私の姿があるように思える。本書との出会いは、「品のある校長とは」と自分に問いかける日々にさせてくれた貴重な機会となつた。こんな思いにさせてくれた教頭に、感謝している。

三笠書房 一一〇〇円



### ■滝本洋平 著

## なぜジョブズは、黒いタートル

### ネックしか着なかつたのか？

有明中(隅)勝 田 隆 志

マイルールという言葉にどのような印象をお持ちだろうか。日々の習慣や思考に取り入れる自分だけのルール、その人自身が大切にしたい価値観とも言えるマイルールの中身は人それぞれである。もちろん、マイルールを決めないことがマイルールという方もおられるかもしれない。

このように主観的であり本人の主張そのものであるマイルールだが、周りの人の理解が得られず人間関係に摩擦やストレスが生じることや、「あるべき・するべき」といったストイックな我慢や忍耐が必要とされることから、どちらかというと言ナスのイメージを抱いてしまいがちである。しかしながら、この本を読み進めると、自分の真の幸せを明確にすることができるといふ、マイルールを持つことのポジティブな価値に気付かされる。さらに、自分の人生にあつてもなくてもいいものは思い切つて

やめるといふ選択について述べられており、この発想について私自身心に響くところがあつた。

さて、タイトルにもあるアップル創業者スティーブ・ジョブズの話である。彼のタートルネックとジーンズのラフな服装は大変有名だが、なぜ彼は常にその格好だったのか。彼の生きる目的は「世界に衝撃を与えること」だったので、大切な時間を生み出すために、服装を考える時間を人生から削除し、自分にとって重要でないものを省いたわけである。朝食に必ずカレーを食べるといふマイルールで有名な野球のイチローをはじめ、この書籍には、各界の著名人のマイルールが短いエピソードと一緒に楽しく紹介されている。マイルール＝美学は、一番大事なものを一番大事にするためのルールであると結んでいる。この書籍に出会い、私自身のマイルールを改めて見つめ直すきっかけになつた。多忙な毎日の隙間時間の息抜きにお薦めしたい一冊である。

A i W o r k s 一四三〇円



# 自然には心耳を澄ませせる 力がある。

大自然を前に小さな  
自分を客観視すると  
物事の本質が見えて  
新しい気付きがある。

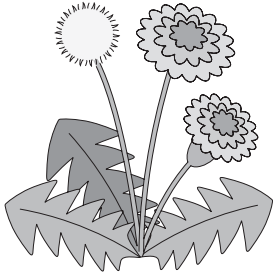


野間半島

© K.P.V.B

提供「僕の贈りもの 日めくりカレンダー」

松山 武史 氏



## 一般財団法人校長会館だより

### 教育長異動

○新任 令和五年四月一日

鹿児島県 地頭所 恵 氏

(前県監査委員)

○新任 令和五年四月一日

霧島市 池田 浩一 氏

(前甲南高等学校長)

○新任 令和五年五月十日

さつま町 中山 春年 氏

(元国分南中学校長)

○再任 令和五年五月三十日

湧水町 平 幸二 氏

### 〔事務局より〕

令和五年度の事務局員は次のようになります。宜しくお願いいたします。

事務局長 六 笠 登 由

事務担当 中 夷 美也子

事務担当 町 田 みどり (1/1から)

## 編集

### 後記



本紙四・五月号では、毎回、新任の校長先生方に原稿執筆を依頼しています。今号にも四人の校長先生方の抱負を掲載いたしました。

拝読させていただいて、ためらいと意欲とが入り混じっていた校長職の始まりを思い起こしました。そして、改めて、自分はどんな学校を創りたいのかと、自分の真意を確かめてみることでした。

さらに、「読書案内」に掲載している「なぜジョブズは、黒いタイトルネットしか着なかったのか?」の紹介文を読ませていただき、自分には仕事において貫いているマイルールがあるだろうかと自問自答しました。校長職六年目にして、未だに揺れ動いている自分がいることを自覚した一方で、「品がいい」と言われる人」の紹介文の中の一節、「人は恥を知るほど、品のある人になれる」の件を読み、この部分は、自分にも多少はあるかもしれないと思えました。読んだことのない書籍でありながら、紹介文を読むだけで、何がしかの示唆を受ける読書をした気になりました。そのうち、しつかりと読破しようと思えます。

さて、本年度、本紙は表紙の絵と題字を変更いたしました。題字枠は、四年ぶりに赤色です。少しの変化ですが、変わらぬものの中に新しさを取り入れていくという「不易流行」の精神で、紙面づくりに努めてまいります。考えます。

本年度もよろしくお願いいたします。

内村英人(喜入小学校)